

「あなた自身ができそうな被災地の農業再生について」

被災地のために今私ができること、それは
「自分自身が被災地の現状を理解し、それを周囲の人々に伝えていくこと」
だと思ふ。

放射線環境学の講義を受けてきて、感じたことはやはり、原発事故後の福島県産の農作物に対する風評被害について。「福島の米は全袋調査のもと、放射線量をしっかり検査した上で売りに出されている。だから安全なんだ。」そう聞かされて、私自身納得した。その上で私は母親に、「福島県産の農産物とかが売りに出されているのはどう思う？」と質問してみた。かえってきた答えは予想通りといったところか、「危なそうだから、あんまり買わないようにしてるよ。安く売られているのもなんか怖いしね。」やっぱりか、僕も最近まで同じような考えをしていたので反論する権利はないのだろうが、少しがっかりしてしまった。

正直、世間ではもう終わったこととして、あるいは放射能汚染について失敗の烙印が押され、福島に対する悪いイメージというものが定着してしまっているというのが現状だ。そのイメージをここから変えていく、というのは私個人の力ではどうにもならないと思う。できることと言えば、周りの人々に関して、少しでも意識を変えてもらうことである。溝口教授がなさっていることだ。(もちろん、先生とは比べ物にならないほど小規模なものになってしまうだろう。)

結局農業再生に今すぐ効果あるような策というのは難しいと思う。とはいえ、実際に行動しようとするに、私は意味があると考えている。今回悪いイメージが定着してしまっただけの背景には、マスコミ関係者にきちんとした情報を知る人がいなかったためであろう。さらには、東電の役員が結局は人ごと、のようになってしまっただけのためなのだろう。私は参考資料にあったような、自分には無関係の事柄、と思っただけで何かを決定することはいけない、と改めて実感した。

自分の中だけで解決するような物事ばかりでなく、いろんな人と関わりながら、協力し、大いに振り回されながら、人のために何かをする、これを私自身大学に入ってからいろいろな場面で痛感している。実際に現場の人々の元へ行き、いろいろな物事に取り組んでいる溝口教授は、とてもバイタリティに溢れているなと思った。飯館で新たな取り組みをしようとするのは、前述の風評などを考えると、難しいことが多いと思う。それでも、前向きに考え、行動しようとしているのは、尊敬すべきだと思ふ。目先の利益に囚われるのではなく、

相手のことを考え、自分自身も当事者として深く関わりながら、行動していく、それがきっといつか自分の本当の利益となって返ってくるのだ、そう信じて、これから行動していきたい。将来どのような仕事をしていくのかは分からないが、この気持ちは忘れずにいくことが大切だ、そんなことを、参考資料を読んで感じた。

できることは少ないかもしれない、それでもできることは少なからずあるはずだ、やっぱり東大生として、「タフ」になっていくことが必要なのだろう。

面白い講義、ありがとうございました。非常にためになりました。